

復活祭第5の主日

# サマリヤ婦の主日

冒頭 P3 <赤本 P1 >

司祭「父と子と聖神の国は崇め讃めらる、今もいつも世々に…」に続いて

聖歌「アミン」「ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし…」3回

(♪) ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし、墓に在る者に生命を賜えり。

日本語  
1



ハリストス 死より 復かつし 死を以て 死を 滅ぼし  
 はかに あるものに いのちを たまえり

日本語  
2



ハリストス 死より 復かつし  
 死を以て 死を 滅ぼし  
 はかに あるものに いのちを たまえり

スラブ語  
3

スラブ語



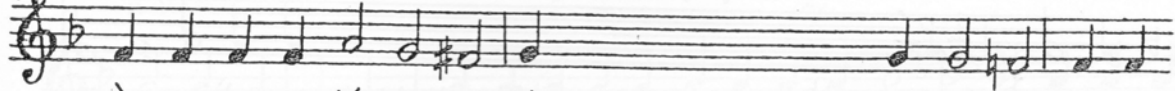
ハリストス ヴオスレ セ イスメル ヴィ スメル チユ スメルチ ポッラッ  
 イ ス シチュ ヴォ ラ ベッ ジ ヴォツ ダ ロヴァ

# トロパリ、コンダク

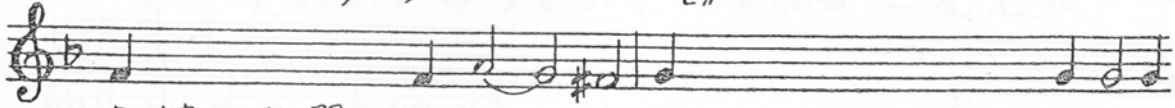
P8 <赤本 P9-13>

主日 4 調「主の女弟子は」、祭の中節のトロパリ「救世主や祭の中節に」、「光栄は」、サマリア婦のコンダク「信を以て」、「今も」、中節のコンダク「万有の造成主」

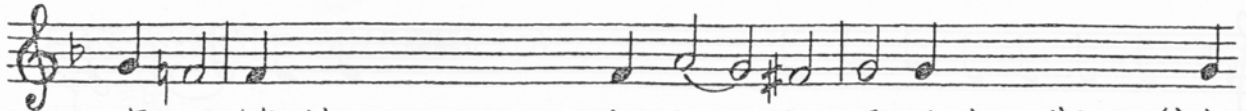
4 調



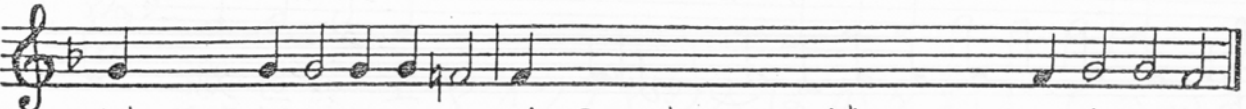
主のおんな弟子は復活の光るおとづれを、かみ



の使より聞きうけて、元祖よりの定罪をふるい



すて使徒にはほこりて言えり、死は亡ぼされ分ト



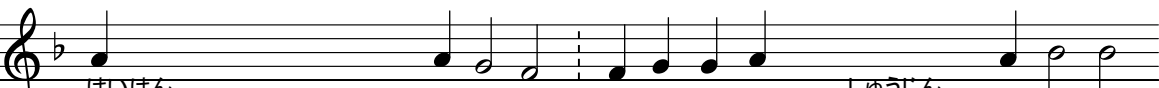
神はふくかつして、世界に大いなる憐れみをたまえり

続けて

【中節のトロパリ】



救世主や 祭の中節において 我が渴ける 霊に



敬虔の水を 飲ませたまえ けだし 爾は 衆人に呼べり



渴く者は 我に來たりて 飲め 我が生命の泉たるハリストス



かみよ 光栄は なんじに歸す 光えいは ちち



子と 聖神に歸す 信を以て 井に來たりし サマリアの

おんな つねに 歌わるる者は 爾、叡智の水を見て  
 飽くまでこれを 飲みて 上なる 永遠の 国を 嗣ぎたり  
 【中節のコンダク】  
 いまも いつも 世世にアミン 万有の造成主 及び  
 主宰 ハリス トースや 律法の祭の 半ばにして  
 爾の前に立てる民に 言え - り 来たりて不死の みずを 汲め  
 故に 我等爾に俯伏して、信を 以て 呼 - ぶ  
 爾の慈憐を我等に たまえ 爾は我が生命の 泉なれば なり

【主や敬虔なる者】【聖なる神】へ戻る

ポロキメン

3調 我が神に歌ひ歌へよ、我が王に歌ひ歌へよ。

(句) 萬民よ、手を拍ち、喜びの声を以て神に呼べ。

わが神に歌いうたえよ わが王にうたいうたえよ

聖使徒行実の読み（11：19～26，29～30）

謹みて聴くべし

か 彼の日、ステファンの時に起りし<sup>おこ</sup> 窘<sup>きんちく</sup> 逐<sup>よ</sup> に因りて散じたる者は、往きて、フィニキヤ、キプル、  
アンティオヒヤにまで至りしが、<sup>いた</sup> イウデヤ人の外、<sup>ほか</sup> 何人にも<sup>なんびと</sup> 言<sup>ことば</sup> を傳<sup>つた</sup> へざりき。然れども、<sup>しか</sup> 彼等  
の中に、<sup>うち</sup> キプル、及び、<sup>ひとびと</sup> キリネヤの人人あり。アンティオヒヤに入りて、<sup>い</sup> 主・イイススを福音<sup>ふくいん</sup> して、  
エルリン人に<sup>つた</sup> 傳へたり。主の手、<sup>とも</sup> 彼等と<sup>あ</sup> 偕に在り、<sup>き</sup> 多数の人、<sup>き</sup> 信じて主に歸せり。此の事の  
<sup>きこえ</sup> 聲聞、<sup>あ</sup> イエルサリムに在る<sup>およ</sup> 教會の<sup>およ</sup> 耳に及びたれば、<sup>つかわ</sup> ワルナワを遣<sup>つた</sup> して、<sup>いた</sup> アンティオヒヤに至  
らしめたり。彼、<sup>きた</sup> 來りて、<sup>おんちよう</sup> 神の恩寵<sup>おんちよう</sup> を見て喜び、<sup>かつ</sup> 且、<sup>しゅうじん</sup> 衆人に、<sup>かた</sup> 心を堅くして<sup>したが</sup> 主に従ふことを  
<sup>すす</sup> 勧めたり。蓋、<sup>けだし</sup> 彼は<sup>ぜんにん</sup> 善人にして、<sup>せいしん</sup> 聖神<sup>しん</sup> と<sup>み</sup> 信とに満てられたる者なり。是に於て、<sup>ここ</sup> 許<sup>おい</sup> 多<sup>あまた</sup> の民  
は、<sup>つ</sup> 主に就けり。其後、<sup>そののち</sup> ワルナワはタルスに<sup>ゆ</sup> 往きて、<sup>たず</sup> サウルを尋ね、<sup>これ</sup> 之に<sup>あ</sup> 遇ひて、<sup>いた</sup> アンティオヒ  
ヤに<sup>たずさ</sup> 攜へ<sup>いた</sup> 至れり。彼等、一年間、<sup>あつま</sup> 教會に<sup>あまた</sup> 集りて、<sup>おし</sup> 許<sup>おし</sup> 多<sup>おし</sup> の民を訓へたり。

門徒が「ハリストティアニン」と稱せらるゝこと、アンティオヒヤより<sup>はじ</sup> 始まれり。

その<sup>その</sup> 其時、<sup>おのおの</sup> 門徒、<sup>そのも</sup> 各、<sup>したが</sup> 其有てる所に<sup>お</sup> 随ひて、<sup>お</sup> イウデヤに<sup>けいてい</sup> 居る兄弟に、<sup>たすけ</sup> 扶助を<sup>おく</sup> 餽らんことを  
<sup>さだ</sup> 定めたり。遂に之を<sup>つい</sup> 行<sup>これ</sup> ひて、<sup>おこな</sup> ワルナワ、<sup>たく</sup> 及び<sup>ちようろうち</sup> サウルの手に<sup>よ</sup> 託して、<sup>よ</sup> 長老等に<sup>よ</sup> 寄せたり。

アリルイヤ 4 調

神よ、爾の宝座は世々に在り、爾の国の権柄は正直の権柄なり。

(句) 爾は義を愛し、不法を悪めり。



福音の読み

サマリヤの婦の主日  
イオアン伝(4:5 ~ 42)

彼の時、イイス、サマリヤの<sup>まち</sup>邑、シハリと名づくる<sup>ところ</sup>處<sup>きた</sup>に來れり。イアコフが、<sup>そのこ</sup>其子<sup>あた</sup>イオシフに與へたる地<sup>かしこ</sup>に近し。彼處<sup>い</sup>にイアコフの井あり。イイス、旅に疲れて、井の<sup>い</sup>傍<sup>かたわら</sup>に坐せり。時、約<sup>およそ</sup>六時なり。サマリヤの<sup>おんな</sup>婦、水<sup>く</sup>を汲む<sup>ため</sup>爲<sup>きた</sup>に來れり。イイス、<sup>これ</sup>之<sup>い</sup>に謂ふ、「我<sup>い</sup>に飲<sup>い</sup>ましめよ」。蓋<sup>けだし</sup>、<sup>その</sup>其門徒は、食<sup>しょく</sup>を市<sup>か</sup>はん爲<sup>ため</sup>に邑<sup>まち</sup>に往<sup>ゆ</sup>けり。サマリヤの<sup>おんな</sup>婦、彼<sup>い</sup>に謂ふ、『爾<sup>い</sup>は、イウデヤ人たるに、如何<sup>いか</sup>にして、我<sup>われ</sup>、サマリヤの<sup>おんな</sup>婦<sup>おんな</sup>に飲<sup>い</sup>むを求<sup>い</sup>むるか』。蓋<sup>けだし</sup>、イウデヤ人とサマリヤ人とは相交際せざるなり。

イイス、之<sup>い</sup>に答へて曰<sup>も</sup>へり、「若<sup>た</sup>し、爾<sup>われ</sup>は、神<sup>たまもの</sup>の賜<sup>たまもの</sup>、及<sup>い</sup>び『我<sup>われ</sup>に飲<sup>い</sup>ましめよ』と、爾<sup>い</sup>に言<sup>い</sup>ふ者の誰<sup>し</sup>たるを知らば、爾<sup>い</sup>、自<sup>し</sup>ら、彼<sup>い</sup>に求<sup>い</sup>めん。而<sup>し</sup>て、彼<sup>い</sup>は、爾<sup>い</sup>に活<sup>い</sup>ける水<sup>みづ</sup>を與<sup>あた</sup>へん」。

<sup>おんな</sup>婦、彼<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、『主<sup>く</sup>よ、爾<sup>い</sup>に汲<sup>く</sup>む器<sup>うつわ</sup>なく、井<sup>い</sup>も、亦<sup>また</sup>深<sup>しか</sup>し。然<sup>しか</sup>らば、何<sup>い</sup>より、爾<sup>い</sup>に活<sup>い</sup>ける水<sup>みづ</sup>あるか。爾<sup>い</sup>、豈<sup>あに</sup>、我<sup>われ</sup>が祖<sup>ちち</sup>イアコフより大<sup>おおい</sup>なるか。彼<sup>い</sup>は、我<sup>われ</sup>等に此<sup>こ</sup>の井<sup>い</sup>を與<sup>あた</sup>へ、己<sup>おのれ</sup>も、其<sup>その</sup>諸<sup>しよ</sup>子<sup>し</sup>も、其<sup>その</sup>家畜<sup>けだし</sup>も、之<sup>これ</sup>より飲<sup>い</sup>みたり』。

イイス、答<sup>い</sup>へて、謂<sup>い</sup>へり、「凡<sup>おほ</sup>そ此<sup>こ</sup>の水<sup>みづ</sup>を飲<sup>い</sup>む者は、復<sup>また</sup>、渴<sup>かわ</sup>かん。然<sup>しか</sup>れども、我<sup>われ</sup>が與<sup>あた</sup>へんとする水<sup>みづ</sup>を飲<sup>い</sup>む者は、世<sup>か</sup>世<sup>か</sup>に渴<sup>かわ</sup>かざらん。乃<sup>すなわち</sup>、我<sup>われ</sup>が彼<sup>い</sup>に與<sup>あた</sup>へんとする水<sup>みづ</sup>は、其<sup>その</sup>中<sup>うち</sup>に於<sup>お</sup>て、永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>の生命<sup>いのち</sup>に湧<sup>わ</sup>く水<sup>みづ</sup>の泉<sup>いづみ</sup>と爲<sup>な</sup>らん」。

<sup>おんな</sup>婦、彼<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、『主<sup>われ</sup>よ、我<sup>われ</sup>に此<sup>こ</sup>の水<sup>みづ</sup>を與<sup>あた</sup>へよ。我<sup>われ</sup>が渴<sup>かわ</sup>かず、亦<sup>また</sup>此<sup>こ</sup>に來<sup>きた</sup>りて汲<sup>く</sup>まざらん爲<sup>ため</sup>なり』。

イイス、<sup>これ</sup>之<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、「往<sup>ゆ</sup>きて、爾<sup>おつと</sup>の夫<sup>こ</sup>を呼<sup>い</sup>びて、此<sup>こ</sup>に來<sup>きた</sup>れ」。

<sup>おんな</sup>婦、對<sup>こた</sup>へて曰<sup>い</sup>へり、『我<sup>われ</sup>に夫<sup>おつと</sup>なし』。

イイス、<sup>これ</sup>之<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、「爾<sup>おつと</sup>が『夫<sup>おつと</sup>なし』と言<sup>い</sup>ひしは是<sup>ぜ</sup>なり。蓋<sup>けだし</sup>、爾<sup>おつと</sup>に五<sup>ご</sup>人の夫<sup>おつと</sup>ありき。而<sup>し</sup>て、今<sup>いま</sup>、有<sup>あ</sup>る者は、爾<sup>おつと</sup>の夫<sup>おつと</sup>に非<sup>あら</sup>ず。此<sup>こ</sup>れ、爾<sup>おつと</sup>、真<sup>まこと</sup>を言<sup>い</sup>へり」。

<sup>おんな</sup>婦、彼<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、『主<sup>われ</sup>よ、我<sup>われ</sup>、觀<sup>み</sup>るに、爾<sup>われ</sup>は預<sup>せんぞ</sup>言<sup>ご</sup>者<sup>し</sup>なり。我<sup>われ</sup>が先<sup>せんぞ</sup>祖<sup>ご</sup>は、此<sup>こ</sup>の山<sup>やま</sup>に拝<sup>はい</sup>せり。然<sup>しか</sup>るに、爾<sup>はい</sup>等は『拜<sup>はい</sup>すべき處<sup>ところ</sup>はイエルサリムに在<sup>あ</sup>り』と言<sup>い</sup>ふ』。

イイス、<sup>これ</sup>之<sup>い</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、「婦<sup>おんな</sup>よ、我<sup>われ</sup>を信<sup>こ</sup>ぜよ。此<sup>こ</sup>の山<sup>やま</sup>にも非<sup>あら</sup>ず、イエルサリムにも非<sup>あら</sup>ずして、父<sup>ちち</sup>を拜<sup>はい</sup>せん時<sup>とき</sup>は來<sup>きた</sup>る。爾<sup>はい</sup>等は、拜<sup>はい</sup>する所<sup>ところ</sup>を知らず。我<sup>われ</sup>等は、拜<sup>はい</sup>する所<sup>ところ</sup>を知る」。

けだし すくい 蓋、救はイウデヤ人よりするなり。然れども、時しかは來きたる。今これは是まことなり。真れいはいしやの禮しん拝お者は、神しんを以もつて、真まことを以もつて、父はいを拜はいせん。蓋けだし、父かは、是ごとくの如はいく彼もとを拜しんする者しんを覓もつむ。神はいは神しんなり。彼を拜はいする者しんは、神もつを以まことて、真もつを以はいて拜はいすべし。』。

おんな 婦、彼いに謂いふ、『我すなわち、知きたる、メッシヤ、即きた、ハリストスは來きたらん。彼ことごと、來きたる時ことごと、悉ことごとく我等ことごとに告ことごとげん』。

イスス、之これに謂いふ、『是これれ、我われ、爾われと語われる者われなり』。

たまたま その 道、其きた門徒おんな、來あやしりて、彼ひとりが婦なにと語なにれるを異ひとりみたれども、一ひとりも、『爾なには、何なにを求なにむるか』、  
あるい 或これは『之なにと何なにを語いるか』と、云いひし者おんななし。時おんなに、婦そのみずがめ、其のこ水まち瓶ゆを遺ひとりして、邑ひとりに往ひとりきて、人ひとり人に  
い 謂いふ、『來きたりて、我わが凡およそ行おこなひし事われを我つに告みげし人こを觀あらよ。是あられ、ハリストスに非ひとりずや』。人ひとり人ひとり  
まち 邑いを出いで、彼ゆに往ゆけり。

こ 此さいの際さい、門徒こ、彼いに請いひて曰らウワイへり、『夫くら子くら、食くらへ』。

しか 然れども、彼これは之いに謂われへり、『我われに、食くらふべき糧かてあり。爾等われが知われらざる者われなり』。

ゆえ 故ゆえに、門徒たがい、互いに言あにへり、『豈たれ、孰しよくか彼おくに食おくを饋おくりたる』。

イスス、彼等いに謂わふ、『我わが糧かては、我われを遣つかわし、者むねの旨おこなを行そのわざひ、其じょうじゆ功あを成あ就あするに在あり。

爾等なほは『尚しかげつ、四かりいれ月きたにして收い穫あらは來われらん』と云つふに非つずや。我われ、爾等つに語つぐ、爾等あの目あを舉あげて、  
た 田たを觀みよ。已すでに白しろくして穫かるべし。穫かる者あたいは、値えを得みて、實いを永いのち遠つの生つ命まに積まむ。播かく者かも、穫かる  
者よるこも、共ために喜けだしばん爲まなり。蓋これ、『彼かは播いき、此こは穫こる』と云こへるは、斯こに於おいて真まことなり。我われ、爾等  
つ を遣つかわして、爾等ろうが勞かせざりし所たにんを穫ろうらしむ。他そのろう人は勞いし、爾等いは其い勞いに入れり。

か 彼の邑まちの多おんなくのサマリヤ人わは、婦わが、『彼およは我おこなが凡われそ行つひし事われを我つに告しやうげたり』と、證しやうせし  
ことば 言よに因よりて、彼ゆえを信つぜり。故ゆえに、サマリヤ人つは、彼ともに就とどまきし時こ、偕こに留こらんことを請こへり。彼こは、  
かしこ 彼處とどまに留ふつかりしこと、二なほ日こなり。尚こ、多こくの者よは、彼しやうの言おんなに因いりて信いぜり。而しやうして、婦おんなに謂いへり、

『我等すでは、已こに爾よの言しんに因あらりて信けだしずるに非みずかず。蓋まこと、自きゆうしゆら聞ききて、『彼まことは誠きゆうしゆに世きゆうしゆの救きゆうしゆ主きゆうしゆ、  
ハリストスなり』と知しれり』。